『若草物語』はなぜ『若草物語』なのか：*Little Women* の邦題を考える
Why Is It *Wakakusamonogatari*?: The Japanese Title for *Little Women* Which Means 'Young Grass'

小松原　宏子
Hiroko Komatsubara

***要旨*:** 2014 年、学研の「10 歳までに読みたい世界名作」シリーズ出版において、19 世紀米文学の名作『若草物語』（ルイザ・メイ・オルコット作）の編訳をする機会に恵まれた。*Little Women* という原題のこの物語は、日本では A tale of young grass という意味の、『若草物語』というタイトルで翻訳されている。1934 年の矢田津世子の抄訳出版と、キャサリン・ヘップバーン主演のキューカー監督作品である映画（1933 年アメリカ）の公開時に吉屋信子によって選ばれた、と言われるこの邦題について考察し、命名の理由についての仮説を立ててみた。

***キーワード*:** 若草物語、日本語タイトル、北田秋圃、矢田津世子、吉屋信子

Abstract: In 2014, I was given an opportunity by Gakken Co. to edit and translate a great piece of American literature from the 19th century, *Little Women*, written by Louisa May Alcott. In Japan, this novel has been published under the name of *Wakakusamonogatari*, which means *A Tale of Young Grass*. It is said that this title first appeared in 1934, when Yada Tsuseko's abridged translation was published and George Dewey Cukor's movie, starring Katharine Hepburn, produced in 1933 in USA, was released in Japan. I examine this Japanese title selected by Yoshiya Nobuko and formulate a hypothesis about the reason for its naming.

***Keywords*:** *Little Women*, Japanese title, *Wakakusamonogatari*, Kitada Akiho,Yada Tsuseko, Yoshiya Nobuko

1.　原題 Little Women について

『若草物語』は 1868 年に書かれた、ルイザ・メイ・オルコットの代表作であり、南北戦争時代のアメリカ北部に生きた四人姉妹、長女メグ、次女ジョー、三女ベス、四女エイミーの一年間を描いた物語である。自伝的物語と言われ、主人公である次女ジョーは作者ルイザ自身がモデルであるとされている。原題の "*Little Women*" は、戦地にいる父からの手紙で四人姉妹を指すことばとして使われている。四人なので複数形の women のわけだが、ひとりであれば当然 little woman となる。そして、単数形の my little woman は、当時、男性から女性への呼びかけとしてよく使われていたことばだということである。

「この単数形の『my little woman』は当時、男の人から女の人への呼び掛けとしてよく使われたもので、特殊な言葉ではありません」（横川寿美子：『若草物語』の三つの映画化---あなたはどのジョーが一番好きですか？/ H26 年度　国際子ども図書館児童文学連続講座講義録より）

しかし、父親から娘への呼びかけとしても一般的であったかどうかは疑わしい。オンライン辞書 weblio で little woman を検索すると、夫が妻を表すことば、とある。

「《口語》「家内」「女房」「うちのやつ」《時に軽蔑的とみなされる》」
（研究社　新英和中辞典）

同じくオンライン辞書である「英辞郎」もまた同様である。父が娘をさすことばとしての意味や例文はない。以下は「英辞郎」に記載されている例文である。

「I am not a rich man, but if there is any danger threatening my little woman, I would spend my last copper to shield her."
私は決して金持ではありませんが、しかし何か私の妻を悩ましているものがあるとしたら、私は彼女を全財産を賭しても、保護してやりたいと思うのですが――」
（日英対訳文・対応付けデータ / 国立研究開発法人情報通信研究機構
書名：THE ADVENTURE OF THE DANCING MEN（暗号舞踏人の謎）
著者：Arthur Conan Doyle　和訳：三上於菟吉）

横川氏の講義内容と辞書の意味から考えるに、一般名詞としての little woman は、文字通りの「小さい」あるいは「小柄な」女性・婦人という意味以外では、おそらく夫から妻への慣用的な呼びかけのことばであったと推測される。どの辞書にも、「軽蔑的な」「侮蔑的な」「見下した表現」などの補足があるが、その時代の社会的な男女関係、夫婦関係においては自然な表現であったとも考えられる。たとえば、日本語の「かみさん」「女房」「うちのやつ」という言葉に、単なる男性から女性への優越感だけでなく、「自分は妻の保護者である」という、その時代なりの夫の愛情の表し方が感じられるとも言える。

「"My little woman," said her husband dubiously, "are you quite sure you're better? Or are you, Sophia, about to break out in a fresh direction?"
（1848, Charles Dickens, *The haunted man and the ghost's bargain* ）
（Wiktionary (2013/04/29 01:30 UTC 版)　書名 ：*The haunted man and the ghost's bargain*（憑かれた男）　著者 ：Charles Dickens）　」

「なあ、おまえ」夫はけげんそうに言った。「本当にそれでよくなったのかい？　それとも、ソフィア、なにかまた違うことが始まるっていうんじゃないだろうな？」（筆者訳）

『若草物語』の翻訳者である矢川澄子によると、作者ルイザ・メイ・オルコットが自身の作品のなかで父から娘への呼びかけとしてこのことばを使った背景には、ルイザの父ブロンソン・オルコットが、彼女とその姉妹に対してこのように呼びかけていたことがある、と言われている。ブロンソンは進歩的な人物であり、革新的な教育者でもあった。

「じっさいこの理想主義者にとって、四人の娘たちは、子供たち（children）でもなければ、少女たち（girls）でもなく、いまだ完成の途上にあるとはいうもののすでにして一個の人格をもった、あくまでも自分ら（men）と対等の存在としての women だったのです。」（矢川澄子：『若草物語』福音館文庫　P469　あとがきより）

矢川氏のこの文章ほど Little Women というタイトルの持つ特別の意味を的確に表現するものはないと言っても過言ではない。“little women”は、一生を父親への強い愛憎のなかで過ごしたといってもいいほどに父の存在が大きかったと言われるルイザにとって、宝物のようなことばだったのであろう。

しかし、そのタイトルにこめられた作者の思いは、日本ではどこまで理解されたであろうか。日本ではなぜここからかけ離れた『若草物語』というタイトルが定着したのだろうか。逆に、この Little Women に相応しい日本語の題はほかにあり得るのだろうか。

2.　邦題のゆくえ

2.1『小婦人』

Little Women が本国アメリカで出版されたのは 1868 年。明治維新の年である。日本で初めて翻訳出版されたのは明治 39 年（1906 年）とあるので、約 40 年後ということになる。

そのときの翻訳者は北田秋圃、出版社は彩雲閣、邦題は『小婦人』であった。この『小婦人』というタイトルはどこから来たものであろうか。単純に、若い新米の翻訳者が、英語をそのまま日本語に置き換えたのだろうか。

「翻訳を任された北田秋圃とはどのような 人物であろうか？残念ながら彼女に関する記録は 残されていない。唯一序文で、自分が女性であること、そしてこの翻訳が初めて任されるもので あることが言及されている。駆け出しの翻訳家か、女学校を出たばかりの文学修行をしていた女性だったのではないかと推測できる。訳は誤訳が多く、文学的には傑作とは言い難い。」

（ドラージ土屋浩美「明治翻訳小説『小婦人』 お転婆ヒロインの登場」
比較日本学教育研究センター研究年報 第６号 P139-140）

1994 年 7 月 6 日の読売新聞朝刊記事「若草物語を初翻訳」によると、「北田秋圃」は女性三人の共同ペンネームであり、そのうちのひとり、高橋なほ子は、今上天皇の家庭教師に任命され来日したエリザベス・グレイ・ヴァイニング氏の通訳兼秘書を務め国際基督教大学図書館長であった松村たね（1917-2018）の母である。政友会の代議士だった夫・高橋本吉の米国プリンストン大学留学中に東京の塾で英語を学んでおり、あとの二人はその時の仲間らしい。「北田秋圃」の「田」は高橋の「た」、「圃」はなほ子の「ほ」から取ったということなので、あとの二人の名前にはそれぞれ「北」「秋」の文字または音があったのであろうと推察される。

しかし、訳者「北田秋圃」の他の翻訳作品は見当たらない。高橋なほ子は『小婦人』の挿絵も描いたということだが、ほかの二人についての記録は残されておらず、高橋をふくめ三名の誰かがのちに翻訳家になったという情報もない。高橋がたねを産んだ年は 1917 年であるから、『小婦人』出版時の 1906 年は相当若かったと考えられる。「はしがき」に「恩師の助力」という文言もあり、いずれにしても、ドラージ土屋氏の言うように、少なくとも『小婦人』に関しては初心者の仕事であったと考えてよいようである。

『小婦人』においては、主人公の四姉妹のメグ、ジョー、ベス、エイミーという名前が、それぞれ菊枝、孝代、露子、恵美子という日本名に置き換えられ、地名も日本のものになっている。そのため話の内容がちぐはぐになっている箇所も見受けられるのだが、鎖国が終わったのが 1854 年（嘉永 7 年）の日米和親条約締結とすると、そこから 50 年しか経っていない日本で、当時の少女たちに親しみをもって読んでもらうために、英語を極力日本語にする必要があったのかもしれない。

人名や地名でさえも日本語に置き換えるほどであれば、邦題も原語をそのまま日本語にしたと考えるのが自然である。しかしそれを考慮に入れたとしても、Little Women がそのまま「小婦人」というのは、稚拙な翻訳とは思われなかったのだろうか。

原題に最も近い『小婦人』という日本語タイトルでの初出版から 30 年後に『若草物語』というまったく違う邦題がついたのも、「小婦人」ではあまりに直訳すぎると思われたからではないだろうか。

「もしかしたらこの人（筆者注：吉屋信子）が「『小婦人』ではちょっと……」と思って『若草物語』にしたのかもしれません。」
（横川寿美子：『若草物語』の三つの映画化---あなたはどのジョーが一番好きですか？/ H26 年度　国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 P48）

現代の読者の目にはややお粗末に見受けられるこの『小婦人』というタイトルも、当時は問題なく受け入れられたのであろうか。明治時代の一般読者の感想は知るすべもない。が、上記のドラージ土屋浩美氏の論文のなかに、ヒントとなるかもしれない記述がある。

「明治中期から後期にかけてのこの時期、 多くの西洋小説の翻訳が出版された。西洋化とともに、女子教育、児童教育への関心が増し、母親が子供に読み聞かせるための本が多数出版された（例えば、『クオレ』『小公女』『小公子』などもこの時期に訳されている）。『小婦人』も子女のため の健全な書物として紹介されたようである。明治 30 年代は、国家事業として女子教育に力が入れられた時代であった。」

（ドラージ土屋浩美「明治翻訳小説『小婦人』 お転婆ヒロインの登場」）
比較日本学教育研究センター研究年報 第６号 P139）

バーネットの『小公子』は、1890 年から 1892 年にかけて、若松しづ（＝賤子）の翻訳により「女学雑誌」に掲載されている。『小公女』は、1900 年にバーネット原作、おのちゅうこう著で鶴書房の『少年少女世界名作全集 ３２』（石森延男・山本和夫編集）に収録された。同年、中山知子の翻訳で『小公女　上』『小公女　下』の二巻も富士メールから出版されている。「翻訳文学」という新しいジャンルが黎明期を迎えたこの時代、「北田秋圃」を名乗る若き新米の翻訳者たち、あるいは出版元である彩雲閣の人間が、これらの人気作品『小公女』『小公子』のタイトルをまったく意識しなかったとは考えにくい。

『小公女』の原題は A Little Princess、『小公子』の原題は Little Lord Fauntleroy である。

Little Women というこの作品のタイトルを日本で初めて訳出するにあたって、これらの先発の邦題が影響した可能性がなかったとは言い切れない。このように並べてみると、「小」で始まる翻訳文学の三大作品、ということでベストセラーの一角に入りこめるのではないか、という出版者の意図が見え隠れしてくる。

『小公子』1890 年　(*Little Lord Fauntleroy*)
『小公女』1900 年　(*A Little Princess*)
『小婦人』1906 年　(*Little Women*)

『小婦人』には坪内逍遥による「序」があり、そこにはこのような一節がある。
「『小公子』以来の好い家庭の讀物と序文代りに御出版を祝し申候」

こののち、1930 年に平木禿木も『小婦人』というタイトルを使用している。一見、稚拙な直訳のようなこの邦題であるが、当時の緻密なマーケティングリサーチによって計算しつくされたものである可能性も捨てきれない。実在の家族をモデルに、質素で堅実な家庭の一年間を描いた物語である *Little Women* は、上流社会への劇的なシンデレラストーリー『小公

女』『小公子』にもひけをとらない名作であるという矜持のもと、『小婦人』として明治の日本に送り出されたのかもしれない。

2.2　さまざまな日本語タイトル

『小公子』『小公女』という邦題が 21 世紀の今日まで愛されているのと対照的に、『小婦人』はやはり長続きしなかった。*Little Women* の翻訳者は現代までに 90 余名を数えるが、『小婦人』というタイトルを使った著者は、結局北田秋圃と平田禿木の 2 名のみであり、禿木も出版社あるいは版によっては、他のタイトルを用いている。

そして、『小婦人』に始まり『若草物語』に至るまでの *Little Women* の日本語タイトルの変遷の歴史を見てみると、現れ消えたものの数は 10 以上を数える。これほどまでにさまざまなタイトルで多くの訳者によって届けられた海外文学はほかに類を見ないと言ってもいいのではないだろうか。

以下は *Little Women* についたタイトルの例である。（編訳・訳注を含む）

『小婦人』　北田秋圃　1906 年　彩雲閣
『リトル・ウィメン』　平田禿木　1927 年　英文世界名著全集刊行所
『四少女』　内山賢次　1933 年　春秋社
『四人姉妹』　中村佐喜子　1934 年　春陽堂
『順（おとな）しい少女達』　平田禿木　1934 年　外語研究社
『若草物語』　矢田津世子　1934 年　少女畫報社
『愛の姉妹』　清涼言　1940 年　杉並書店
『少女』　岡田美津　1941 年　研究社
『乙女の幸福』　窪田啓二　1948 年　宝雲舎
『リトゥルウィメン（四人姉妹物語）』　服部清美　1949 年　京都・教育出版
『四人の少女』　壽岳しづ　1949 年　岩波書店
『リトル・ウィーメン』　近藤いね子　1953 年　大学書林
『おとなりの男の子〈若草物語〉』　石井桃子　1958 年　あかね書房
『少女たち』　前島清子　1967 年　清水書院

こうして並べてみると、市民権をもつに至らなかった「小婦人」がいちばん Little Women という原題の意味に近いことがわかる。

ブロンソン・オルコットというひとりの父が四人の娘に呼びかけていたというこのことばには、その時代の文化、歴史、社会背景だけでなく、個人の思想や親子関係まで、すべてが収斂されているといっていい。このタイトルにこめられた作者の思いをパーフェクトに反映し、かつ美しい邦題があれば、と誰もが考えることだろう。しかし、筆者も翻訳の仕事

をしているが、翻訳とは四角い歯車と三角の歯車を合わせるようなものである。そのすきまを埋めるものは決して見つからない。言語はたんなる「ことば」だけではない。異言語同士が完全に対応することなど永遠にない。日本の翻訳者・出版者が Little Women というタイトルと 100%同じものを日本語で用意できなかったとしても、それは彼らの責任ではなく、むしろ原作の持つまたとない豊かな個性の表れであると理解してよいのではないだろうか。

さて、さまざまな邦題で出版された *Little Women* だが、『若草物語』が不動の地位を占めるまでに、最後まで踏みとどまったのは岩波書店の『四人の姉妹』である。

「その後にも岩波書店は『四人の姉妹』という訳題で出していて、『若草物語』に迎合しないでずっと頑張っていました。しかし、これももう持ち堪えられなくなったのか、2013 年、訳も新しくして出版された版では『若草物語』（2013）となっています。ですから、もう『若草物語』一色になってしまっているのですけれども……（後略）」
（横川寿美子：『若草物語』の三つの映画化---あなたはどのジョーが一番好きですか？/ H26 年度　国際子ども図書館児童文学連続講座講義録より　P48）

これによると、『若草物語』以外の題名が完全に絶滅したのは 2013 年であるから、比較的最近まで他の邦題も存在していたことになる。しかし、この「最後までがんばった」岩波書店のもの以外は、副題または括弧の中に「若草物語」とあったり、アニメ『愛の若草物語』のようにタイトルに「若草物語」の文言が含まれていたりするものばかりである。

Little Women が日本で完訳出版されたものおよび原作とされた著作の出版点数は、筆者が数えたところでは 1906 年の初出から 2020 年までの間で 194 点にのぼる。そのうちタイトルが『若草物語』であるものと、『愛の若草物語』のように「若草」ということばを含むタイトルのものは、合わせて 167 点。著者は漫画家・編訳者・訳註者を含めて 94 名、そのうちタイトルに『若草物語』を用いたのは 84 名、出版元は 76 社、そのうち『若草物語』という邦題を 1 度でも用いたものは 62 社である。（付録 1 参照）

やはり *Little Women* の翻訳の歴史のなかでは、80 年にわたって『若草物語』というタイトルが日本の出版界のみならず、映画やアニメの世界までほぼ制覇してきたのである。

2.3 『若草物語』はなぜ『若草物語』なのか

さて、ここで、日本で完全に定着している「若草物語」というタイトルについて、その誕生と定着のプロセスを整理してみたい。

まずは、コンコードのオルコット記念館であるオーチャード・ハウスに問い合わせてみたところ、Special Project である喜久子・ミルズ氏より迅速かつ丁寧な回答を得た。

「1934 年キャサリン・ヘップバーンの“*Little Women*”が、日本で公開されるとほぼ同時期に、矢田津世子さんが、『若草物語』という題名で、“*Little Women*”の抄訳本を出されました。その後は、日本では、「若草物語」として定着しているようです。」

（Commented by Ms Kikuko Mills, Special Project, of Louisa May Alcott's Orchard House in Concord, MA, USA / August 3, 2020）

ミルズ氏からは Asahi Weekly に同様の記事があることも伺った。

「1934 年、日本でキャサリン・ヘプバーン主演の『若草物語』が公開されるにあたり、その日本語版監修に関わった小説家の吉屋信子さんや、公開のほとんど同時期に『若草物語』（抄訳）を出した矢田津世子さんがつけたのでは、と言われますが、はっきりとは分かりません。とにかくこの 34 年の映画公開時に「若草物語」が定着したようです。」

（谷口由美子「『若草物語』と L・M・オルコットの世界」Asahi Weekly No.2421）

また、横川寿美子氏は、国際子ども図書館の連続講座（2015 年）のなかで、「『若草物語』のタイトルはどこから来たのか。原題からはどう頑張っても『若草物語』にはなりません。これは作品のイメージとして出てきたもの」と断ったうえで、初めて「若草物語」というタイトルが登場した 1934 年に日本で公開されたジョージ・キューカー（George Dewey Cukor）監督の映画と、その字幕監修にあたった吉屋信子について触れている。「字幕には監修が付いていましたが、それは正しい翻訳を目指すというより、こなれた日本語にすることが主な目的だったわけで、これをやった人が吉屋信子（1896-1973）という人です。」「少女小説を書いて一世を風靡した人で、大正年間に長く少女雑誌に連載された『花物語』という少女小説の金字塔と言えるような作品があります。もしかしたらこの人が「『小婦人』ではちょっと…」と思って『若草物語』にしたのかもしれません。」

（横川寿美子：『若草物語』の三つの映画化---あなたはどのジョーが一番好きですか？/ H26 年度　国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 P48）

1934 年に出版された『若草物語』には、矢田津世子抄訳（少女畫報社）のものと水谷まさる訳（金蘭社）のものがあるが、水谷版が出版されたのは 11 月なので、9 月出版の矢田版が先である。よって、『若草物語』という邦題による最初の訳書は矢田津世子による抄訳『若草物語』（少女畫報社）ということになる。

しかし、いずれにせよ、喜久子・ミルズ氏の回答にあるように、この映画の劇場公開と、矢田津世子の『若草物語』の出版は非常に接近していて、まさしく「ほぼ同時」である。

記録によると、映画『若草物語』の日本における劇場公開は 1934 年 10 月 4 日（『舶来キネマ作品辞典　第 3 分冊　日本で戦前に上映された外国映画一覧』世界映画史研究会編　科

学書院　P2485）であり、少女畫報社の矢田津世子抄訳『若草物語』は 1934 年 9 月 15 日印刷 9 月 20 日発行である。矢田の『若草物語』出版のほうがわずかに先であるが、その差はたった 2 週間であることがわかる。

書籍の出版も映画の公開も、それ以前から相当の準備期間を要するものであるから、映画のほうがたった 2 週間前に出版された本のタイトルを参考にしたとは考えにくい。また、矢田の本のタイトルが映画の邦題から取られたということも、時系列的に不可能である。

では、本と映画がほぼ同時に、偶然同じタイトルで出版と公開がなされる、ということがあり得るのであろうか。しかも、横川氏が「原題からはどう頑張っても『若草物語』にはなりません」と語るように、このタイトルは Little Women というオリジナルからはかなり乖離している。「たまたま一致した」とするのはあまりにも苦しいので、ここは出版社と映画会社がタイトルを擦り合わせ、共同戦線で宣伝活動を行ったと考えるのが順当である。事実、映画と本の広告が抱き合わせになっていた、ということの記録も残っている。

「資料８によると、映画の封切りは新聞広告によれば同年 10 月 4 日で、映画の広告中に小説を PR する記述も見られます。
８　［広告］映画「若草物語」／帝国劇場　ほか
読売新聞 1934.10.04 夕刊,p.3.（当館契約データベース　ヨミダス歴史館）
＊「四日封切」、「若草物語　矢田津世子譯編　少女畫報社発行（中略）全国書店にあり」との記述があります。」（レファレンス共同データベース　提供館　国立国会図書館　管理番号 D110910173727 事例作成日　20110928）

また、矢田の『若草物語』初版本には映画のシーンの写真がふんだんに挿入されている。本国での公開は一年前だったとしても、日本での封切り前にスチール写真がこれだけたくさん挿絵代わりに使われているのだから、出版前からのタイアップはほぼまちがいない。

では、本の出版と映画の公開が連携していたのであれば、いったいこの邦題はいつ、誰が最初に考えた出したものであろうか。矢田津世子か吉屋信子、それとも映画会社の担当者あるいは字幕翻訳者であろうか。

筆者がこの物語を初めて読んだのは偕成社版「少年少女世界の名作 9『若草物語』原作オルコット/富沢有為男」（1969）であった。父に買い与えられた本の最後のページに、母の字で「四十四年十月三十日（読了）宏子三年生」とある。筆者にとって『若草物語』ははじめから「若草物語」であり、それ以外の何物でもなかった。しかし、2014 年、自分がこの愛する古典を編訳するにあたり、原題の Little Women がなぜ「若草物語」というタイトルになったのかが急に気になり始めた。

オルコットの原文に「若草」と訳せるような英語の箇所は見当たらない。物語のタイトルに「若草」ということばが冠せられる由来と判じられるようなエピソードもない。

おそらくは横川氏が語るように、これは「作品のイメージとして出てきたもの」なのだ。

「若草」は種でもなければ芽でもない。ある程度成長し、おとなの「草」のすがたになっている。が、成熟する前の勢いとたくましさ、もっと伸びたいという意志と情熱をもった青年を連想させる明るいことばである。試行錯誤しながら自立した女性への道を前向きに歩む四姉妹のすがたに相応しいことばとも言える。

しかし、横川氏が「原題からはどう頑張っても『若草物語』にはなりません。」と語るように、「若草」ということばはいったいどこから出てきたのか、と首をひねりたくなることは否めない。作者自身が Little Women という、父から娘への呼びかけのことばをタイトルにしているうえに、物語の本文にも「若草」に関係のある内容の記述はない。しかも、物語の最後の最後で、「この物語のタイトルは Little Women です」と、作者ルイザ・メイ・オルコット自身が、まるで念押しするかのように、声高らかに宣言しているのである。

So grouped the curtain falls upon Meg, Jo, Beth and Amy.　Whether it ever rises again, depends upon the reception given to the first act of the domestic drama, called “LITTLE WOMEN.”

（*Little Women*,　Penguin Classics　P.235）

原書を調べれば調べるほど、Little Women が「若草物語」になる理由が遠ざかっていく。

ここで浮上してくるのが、映画の日本語字幕監修をした吉屋信子の存在である。1896 年生まれの吉屋信子は、1907 年生まれの矢田津世子より 10 歳以上年上であるが、二人の間には親密な交際があったと記録されている。吉屋の『自伝的女流文壇史』には、「忘れぬ眉目 矢田津世子と私」という項目があり、矢田にかなり目をかけていた、いや、熱烈にかわいがっていたともいえる様子がうかがえる。当然矢田も女流作家の大先輩として吉屋を慕っていたことであろう。その吉屋の代表作が『花物語』である。日本の少女のあいだで一世を風靡したこの作品と双璧をなすアメリカの作品、として *Little Women* を紹介したいという思いが矢田、吉屋、あるいは映画配給会社のいずれかに芽生えたとしても不思議ではない。オルコットの著作の中にも *Flower Fables* など、『花物語』と訳されてよいような作品がないわけではない。けれど、当時の日本の読者のあいだで圧倒的な人気があり、知られていたのは断然吉屋の『花物語』である。

「花」に対応する字は「草」「木」「葉」等であろう。といっても、『花物語』の対になるものとして『草物語』『木物語』『葉物語』では格好がつかない。しかし、ただの「草」でなく「若草」ならば------語感もよいし、少女たちの成長物語、という内容にも見合っている。『若草物語』という題は、『花物語』の愛読者たちにも受けがよいのではないだろうか。

そして、おそらくは「日本の『花物語』に並ぶアメリカの『若草物語』」、というこの発案は吉屋自身も非常に気に入っていたのではないだろうか。同性愛者と言われる吉屋は、矢

田津世子という年下の美貌の女流作家をいろいろな意味で非常に愛していた。吉屋自身も同年（1934 年）に雑誌「少女の友」の 10 月号別冊付録に『リットル・ウィメン』と題した編訳を載せている（谷口由美子「時代をこえて人気もの……『若草物語』」図説子どもの本・翻訳の歩み事典）P111）のだが、それにもかかわらず、自らの代表作『花物語』と対になるタイトルを矢田の抄訳に与えた、または快く許可したことで、矢田への愛情を表そうとしたのかもしれない。

命名の由来が謎に包まれたこの邦題も、「映画公開にあたって吉屋信子が選んだ」あるいは「吉屋信子がつけた」と言われる点では、後年のどの説においても一致している。

2.4　名付け親はだれか

それでは、はじめにこのタイトルを思いついたのは誰なのだろうか。矢田津世子か、吉屋信子か、あるいはどちらでもない第三者だろうか。筆者は、由来はどうあれ、いずれにしてもこの邦題は著者の矢田自身が考えたものではない、と推測する。理由は、まるで後付けしたかのような、この序文である。

「一八六一年の南北戦争を背景に、當時の純朴なアメリカの家庭生活を描いたこの物語はルイザの少女時代の生活を髣髴たらしめる。

貧しくとも母の愛の中にすくすくと伸びてゆく若草のやうな姉妹----　（P1）」

（　矢田津世子『若草物語』序文「『若草物語』に就いて」）

Little Women が「若草物語」になったいきさつの、唯一の手がかりといってもいい箇所である。しかし、邦題の由来として後の研究者がこの一文を取り上げることはほとんどない。序文にはあるが本文には一度も登場しないこの表現には、『若草物語』という邦題を納得させるほどの説得力がないからだと思われる。

矢田津世子の『若草物語』は原書をかなり削った抄訳である。そして物語を進めるための補足として、原文にない矢田のことばや文章が大幅に加筆されている。もし、矢田自身が、原題とかけ離れたタイトルを考えつき、それを正当なものとしたかったのであれば、本文の中に「若草」に関する説明を入れたはずである。少なくとも、2-3 で挙げた物語の最後の一文にそのタイトルを入れて訳すべきではなかったか。

筆者自身も 2014 年の学研「10 歳までに読みたい世界名作」シリーズで編訳を担当したとき、『若草物語』というタイトルが本文の内容にまったく紐づいていないことに違和感をもち、原題の由来である父親からの手紙のなかに、little women の訳語の代わりとして「若草」ということばを盛り込んだ経験がある。

「この戦争から無事に帰れたら、わたしたちはきっとじまんの若草のおとめたちをいっそう愛し、ほこらしく思うことでしょう。」
（学研　10 歳までに読みたい世界名作 5『若草物語』P23）

こじつけかもしれないが、子ども向けの編訳版の中にも、いや、子ども向けだからこそ、「若草物語」というタイトルに、なんらかの説明のつく要素がないと、と考えたわけである。ちなみに、この箇所は原文では以下のようになっている。

“-----I know they will remember all I said to them, that they will be loving children to you, will do their duty faithfully, fight their bosom enemies bravely, and conquer themselves so beautifully, that when I come back to them I may be fonder and prouder than ever of my little women.”

さらに、筆者は自分の編訳のラストでマーチ氏が娘たちにかけることばを、「ただいま。わたしの若草のおとめたち。」（同上　P148）としたが、ここでも原作に little women に当たることばはない。唯一ジョーに向かって、「えりはまっすぐだし、靴ひもは結んであるし、口笛も吹かないし、わるいことばもつかわない、若いご婦人だ」（矢川澄子訳）（福音館文庫『若草物語』P442）とあるせりふも、原文では I see a young lady who pins her collar straight,-----となっている。

筆者は「あとがき」の限られた字数の中で、タイトルについてこのように説明した。

「『若草物語』は、今から約百五十年前にアメリカで書かれた物語です。原題は『Little Women』（小婦人たち）といいます。「婦人」というのは大人の女性のことで、戦地からの手紙で、お父さまのマーチ氏が四人のむすめに「小さな婦人たちよ」とよびかけています。日本ではこのお話は『若草物語』として知られていますので、ここでは「小婦人」を「若草のおとめ」と訳しました。むすめたちがりっぱな一人前の女性になるまで、若草のようにまっすぐに、すこやかに育ってもらいたいというマーチ氏のねがいをこめて。」（学研　10 歳までに読みたい世界名作 5『若草物語』P150）

この苦しい言い訳を子供向けに簡略にまとめるのに四苦八苦したことが昨日のことのように思い出される。このあとがきに編集部がつけたタイトルは「みずみずしい若草のように、成長していく四姉妹」。編集者も察して手助けしてくれたのであろう。

しかし、当然ながら作者のルイザ・メイ・オルコットはのちの日本人翻訳者がそんな苦労をすることになるとは夢にも思わなかったわけで、10 ページで述べたように、原書の *Little Women* は “LITTLE WOMEN.”で終わっている。その箇所を、完訳版を訳した矢川澄子は以下のように訳している。

「といったところで、メグとジョーとベスとエイミーの上に幕はおります。この幕がふたたびあがるか否かは、この『若草物語』なる家庭劇の第一幕の評判にかかっているわけです。」（福音館文庫『若草物語』P467）

このラストの一文で、この物語のタイトルが決定づけられるのである。したがって、Little Women という原題の本質をこよなく理解し、マーチ氏の手紙の中の little women を「わがいとしきご婦人がた」（同上 P26）と訳した矢川でさえ、この大文字の“LITTLE WOMEN”の訳に関しては『若草物語』の軍門に下らざるをえなかった。

よって、仮に矢田津世子が『若草物語』というタイトルの名付け親であるならば、このシーンを外すわけはなく、抄訳の際に何かその説明を加えたはずだと考えられる。しかし矢田版の抄訳では、このラストシーンはみごとに削られてしまっている。自分で考えた邦題なのであれば、本文の中でここに触れないはずがない。しかも、矢田の作品の中に四姉妹を「若草」にたとえた表現はない。全篇のなかで「若草」ということばが登場するのは P77 のこの一回のみである。

「軈てふたりは森の中を歩いてゐた。風が高い梢を渡ってゐた。春が近い。土が日光を吸ひ込んでふっくりと肥つて来てゐる。その下から若草が間もなく小さな芽を覗かせて、春を偵察するのであらう。」

ジョーとローリーが散歩をしている場面の何気ない風景描写であり、しかもこのあとふたりは大げんかをする。せっかく「若草」を出すならここでなくても、というこの一か所だけなのである。やはり矢田は、執筆中はタイトルが『若草物語』になるとは思っていなかった、と考えるのが妥当であろう。だからこそ、あわてて序文に「若草のやうな姉妹」ということばを加えたにちがいない。以上の理由で、筆者は『若草物語』という邦題を考えたのは矢田津世子ではないと考える。さらに、邦題が決まったのが本の出版と映画の公開の直前であったことも想像に難くない。

しかし麗人の女流作家・矢田津世子による『若草物語』は、同じく美貌の女優キャサリン・ヘップバーン主演の映画とともに、そのタイトルごと、熱狂的な人気を博すこととなった。そして、映画公開のわずか 2 か月後に出版された水谷まさる訳（金蘭社）の作品にも同じ題名がつけられている。現存している金蘭社版はほとんどないが、所蔵館である大阪国際児童文学館のレファレンス回答によると、目次の前に「父兄へ」というページが 1 ページあり、次のように書かれている、とある。

「わたしは、尋常五六年の方々にもわかるやうに、更に整へました。むろん、書き方のうへにも、また内容のうへにも、それぞれ適當に整へたのであります。」

つまり、金蘭社『若草物語（少年少女世界名著文庫）』も編訳だったことになるが、そこにもタイトルについての説明はなく、前掲の「父兄へ」の中に「ルイザ・メイ・オルコットといふ、アメリカの女流小説家の書いた二つの小説を、一つにして書いた物語が、『若草物語』であります。これは映画になつて非常な評判でした。」という一文があるということである。また、矢田版と同様、「映画のシーンと思われる写真ページが 12 枚挿入」（大阪府立図書館：e−レファレンス回答 2021.1.19）ということなので、やはり映画興行とのタイアップ部分があったと推測される。

興味深いことに水谷まさるは 14 年後の 1948 年に、やはり『若草物語』というタイトルで京屋出版社から完訳版を出しているのだが、そこでは問題の最後の一文はこうなっている。

「こうして、メグとジョウとベスとエミイが、たのしくしているところへ幕はおりました。この幕がふたたびあげられるかどうか、それは、この「愛の姉妹」とよばれる家庭劇の第一幕が、いかにお客さまがたに、迎えられるかによるのであります。おわり。」
（『若草物語（少年世界文学選 5）』（オルコット/著　水谷まさる/訳　京屋出版社 P217）

さらに、水谷は完訳版において父マーチ氏からの手紙のなかの little women には何の訳語もあてていない。

「わたしが凱旋のときには、以前にもまして愛らしく、誇りうるように生長しているように、出發のときに申し聞かせたことを、すべてよく記憶していると思います。」（同上 P16）

すなわち、矢田と同様、水谷もこの邦題について本文中で全く言及していない。やはり翻訳作業中はこの表題がつくことを予想していなかったと考えてよいのではないだろうか。むしろ水谷はもともと『愛の姉妹』というタイトルでの出版を考えていたと推測できる。

しかし、その後 *Little Women* の邦題は、なだれを打つように『若草物語』一辺倒へと向かっていく。一般の読者は原文と訳文を照らし合わせることの少なかった時代であろうが、あとに続く翻訳者たちさえもこの題名に倣ったのは、映画の人気に加え、もしかしたらこの題名が『花物語』の作者であり映画の字幕監修者であった吉屋信子へのオマージュであることを理解していたからなのかもしれない。

3.　『若草物語』という邦題の功罪

映画の公開がなければ、映画のタイトルを吉屋信子が『若草物語』に決めなければ、そして映画の人気がそれほどでもなければ、『〇〇物語』という、無難だが地味でおとなしいこ

の邦題は、果たして「最後の勝者」になったであろうか。

横川寿美子氏が、2015 年の講演の中で「とにかく、それで、映画はヒットして、それ以降の書籍もどんどん『若草物語』になっていってしまったのです。」「ですから、もう『若草物語』一色になってしまっているのですけれども」と、繰り返し「なってしまった」と表現している（H26 年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 P48 ）ように、原題の Little Women というタイトルから乖離してしまったこの邦題を嘆く声は少なくない。実際、筆者も 2019 年の研究紀要『Who Is Hannah?:19 世紀米文学におけるバイプレイヤー考』の中で、横川氏のこの講演録を引用しつつ、「日本では初期の翻訳では『小婦人』として出版されている。邦題についての論考は脱線になるので割愛するが、いずれにしても四姉妹が物語の表題として使われていることには違いがなく、その意味では「若草物語」が一番原題から遠いことになる。」と書いた。たしかに、矢川澄子氏が述べるところの Little Women にこめられた作者ルイザ・メイ・オルコットの思いが、何ひとつ伝わらない表題なのではある。

しかし、一本の映画のヒットだけでこのタイトルが 80 年も生き残り、世を席巻したと考えてよいのだろうか。キューカー版映画『若草物語』の公開後も、他のタイトルでの出版は続いた。しかし、やがてそれらは淘汰され、『若草物語』だけが残った。

それだけではない。「若草物語」は、四姉妹を表すことばとしても市民権を得ている。私事だが、わが家には三人の娘がいる。三女が生まれたときに、「四人目が男の子だとわかっていたらもうひとり産むんだけどな」と冗談を言うと、決まって「あら、『若草物語』もいいじゃない」という返事が返ってきたものだ。残念ながら「エイミー」は生まれなかったものの、「お母さんと足して『若草物語』ね」と言われれば、四姉妹のようだと言われている、と思って嬉しくなったことを覚えている。「若草物語」は、等身大の仲良し四人姉妹を表す日本語として通用するほどまでに定着したのである。

ところで、喜久子・ミルズ氏は、メールでの回答の最後にこう記している。

「オーチャード・ハウスでは、日本語訳が一番詩的で素敵という評判なのです。」

賛否両論はあるであろうが、この素朴なタイトルがオルコットのお膝元で高く評価されたことは素直に喜ばしい。

「小婦人」「四姉妹」であったとしたら「詩的」であるという評価は得られなかったであろう。少なくとも 4 人の娘をもつ母親が「お宅のお子さんは『小婦人』ね」と言われることはなかったにちがいない。

その本質的な是非はともかくとして、「若草」はメグ・ジョー・ベス・エイミーという愛すべき少女たちを表すことばとして、日本の地にしっかりと根をおろし、今も瑞々しく萌え続けている。

そして、花として散らず、草として生き残ったその強さの根源は、ルイザ・メイ・オルコ

ットが書いた *Little Women* という物語の力にあることは言うまでもない。

21 世紀になり 20 年も経つ今、若い読者の多くは、矢田津世子も吉屋信子も『花物語』も知らない。その数は今後も増えていくことだろう。

しかし、老若男女ふくめて、今も、これからも、『若草物語』を知らない、という日本人はほとんどいないにちがいないのである。

注

本文における『若草物語』は、Little Women Part I を指すものである。

Acknowledgement

The author would like to thank the following: Ms Kikuko Mills（喜久子・ミルズ氏）, Special Project, of Louisa May Alcott's Orchard House in Concord, MA, USA.

参考文献

Alcott, Louisa May (1989) *Little Women*, the Penguin Group.
オルコット (1904)　『小婦人』北田秋圃、彩雲閣
オルコット (1934)　『若草物語』水谷まさる　京屋出版社
オルコット (1934)　『若草物語』矢田津世子　少女畫報社
オルコット (2004)　『若草物語』矢川澄子訳、福音館文庫
川戸道昭編集 (2006) 『児童文学翻訳作品総覧　明治大正昭和平成の 135 年翻訳目録　7 アメリカ編』大空社
川西弘子 (1981) 「日本における Louisa May Alcott の書誌Ⅰ：文学作品」『日本大学芸術学部紀要』11 号より、日本大学芸術学部
子どもの本・翻訳の歩み研究会編 (2002)『図説子どもの本・翻訳の歩み事典』柏書房
児童文学翻訳大事典編集委員会 (2007) 図説児童文学翻訳大事典 第 2 巻
谷口由美子 (2020)「『若草物語』と L・M・オルコットの世界」Asahi Weekly No.2421 June21, 2020
ドラージ土屋浩美 (2010)「明治翻訳小説『小婦人』 お転婆ヒロインの登場）
比較日本学教育研究センター研究年報 第 6 巻
Center for Comparative Japanese Studies Annual Bulletin
発行：お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター
横川寿美子 (2015) 「『若草物語』の三つの映画化：あなたはどのジョーが一番好きですか？」「児童文学とそのマルチメディア化：H26 年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録」より講座レジュメ、国立国会図書館国際子ども図書館
吉屋信子 (1962)　『自伝的女流文壇史』中央公論社
読売新聞 (1994.7.6)「若草物語を初翻訳」

Received on 28 January 2021

付録１、Little Women 日本での出版目録（小松原宏子作成）

番号	発行年号	発行月	題名	翻訳者	出版社	備考
1	1906	12	小婦人	北田秋圃	彩雲閣	
2	1923	8	四少女	内山賢次	春秋社	家庭文学名著選 7
3	1927	9	リトル・ウィメン	平田禿木	英文世界名著全集刊行所	
4	1930	6	小婦人	平田禿木	改造社	
5	1930		英文小説少女	岡田美津	研究社	
6	1932		リットル・ウィメン	平田禿木	外語研究社	英文訳註叢書 32
7	1933	8	四少女	内山賢次	春秋社	春秋文庫
8	1933		小婦人	平田禿木	外語研究社	
9	1934	5	順しい少女達	平田禿木	外語研究社	
10	1934	11	四人姉妹	中村佐喜子	春陽堂	
11	1934	9	若草物語	矢田津世子	少女畫報社	
12	1934	11	若草物語	水谷まさる	金蘭社	少年少女世界名著文庫
13	1936	4	リットル・ウィメン	平田禿木	外語研究社	
14	1939	11	四人姉妹	松本恵子	新潮社	
15	1940	5	愛の姉妹	清涼言	杉並書店	
16	1940		若草物語	清涼言	図南書房	
17	1941	3	若草物語---愛の姉妹（リットルウィメン）	清涼言	杉並書店	
18	1941	10	少女	岡田美津	研究社	
19	1948	1	四人姉妹	松本恵子	大泉書店	
20	1948	6	若草物語	水谷まさる	京屋出版社	少年世界文学選 5
21	1948	7	乙女の幸福	窪田啓二	宝雲舎	
22	1948	8	四人姉妹	安藤一郎	ヒマワリ社	
23	1949	1	リトゥルウィメン（四人姉妹物語）	服部清美	京都・教育出版	
24	1949	4	若草物語（名作少女小説）	矢田津世子	金の星社	
25	1949	5	四人の少女	壽岳しづ	岩波書店	岩波文庫
26	1949		リトウル　ウイメン	清涼言	霞が関書房	
27	1949	11	若草物語	中村佐喜子	名曲堂出版部	
28	1950	1	若草物語	大久保康雄	三笠書房	世界文学選書 20
29	1950	1	若草物語	赤坂一郎	國際出版社	アメリカ映画シナリオ・シリーズ 18
30	1950	5	若草物語（四少女第１部）	吉田勝江	角川書店	角川文庫

31	1950	9	若草物語（オルコットの人と作品）	ダイジェスト・シリーズ刊行会	ジープ社	
32	1950	12	若草ものがたり	松本恵子	主婦之友社	
33	1950		若草物語	石坂洋二郎	主婦の友社	
34	1950		四人の少女（わが家の巻）	松原至大	大日本雄弁会講談社	
35	1951	3	若草物語	富沢有為男	偕成社	世界名作文庫 2
36	1951	9	若草物語	松本恵子	新潮社	新潮文庫
37	1951	9	若草物語	荻田庄五郎	開文社	英米文学訳註叢書 2
38	1951		若草物語	大久保康雄	三笠書房	世界映画化名作全集 1
39	1951		若草物語	宮脇紀雄	黎明社	
40	1952	6	若草物語	松原至大	大日本雄弁会講談社	世界名作全集 32
41	1952	10	若草物語（四人の少女）	カバヤ児童文化研究所	岡山・カバヤ販売	カバヤ児童文庫 1 巻 11 号
42	1952	12	若草物語	大久保康雄	三笠書房	若草文庫
43	1952		Little Women	三木春雄	南雲堂	
44	1953	7	若草物語	南義郎	集英社	おもしろ漫画文庫 3
45	1953	8	若草物語	三谷晴美	小学館	女学生の友
46	1953	10	リトル・ウィーメン	近藤いね子	大学書林	大学書林語学文庫
47	1953	12	若草物語	安藤一郎	創元社	世界少年少女文学全集 8・アメリカ編 2
48	1953		少女（若草物語）	三木春雄	南雲堂	フィニックス・ライブラリー英和対訳 15
49	1953		若草物語	村上一江	日本書房	世界童話文庫 73
50	1953		Little Women	木戸一男	山口書店	
51	1954	1	若草物語	志村明子	日本書房	学級文庫三、四年生
52	1954		若草物語	三木春雄	南雲堂	南雲堂不死鳥文庫
53	1955	4	若草物語	大久保康雄	河出書房	河出文庫
54	1955		若草物語	堀寿子	講談社	名作物語文庫 7
55	1956	7	若草物語	安藤一郎	筑 61 摩書房	世界の名作 9
56	1957	2	若草物語	村上一江	日本書房	世界童話文庫 27
57	1957	7	若草物語	池山広	集英社	少年少女物語文庫 1
58	1957	10	若草ものがたり	山主敏子	偕成社	児童名作全集 64
59	1957	11	若草物語	宮脇紀雄	黎明社	世界名作全集
60	1957	12	若草物語	西田実	学生社	直読直解アトム英文双書第 12
61	1957		若草物語	竜口直太朗	評論社	ニューメソッド英文対訳シリーズ
62	1958	3	四人の姉妹	遠藤寿子	岩波書店	岩波少年文庫

63	1958	4	若草物語	沢田光子	日本書房	小学文庫三、四年
64	1958	6	若草物語	田島準子	東光出版社	新選世界名作選集
65	1958	12	若草物語	大久保康雄	平凡社	世界名作全集 15
66	1958		おとなりの男の子（若草物語）	石井桃子	あかね書房	
67	1958		若草物語	松本恵子	ダヴィッド社	
68	1959	4	若草物語	伊藤佐喜雄	偕成社	世界少女名作全集 14
69	1959	6	若草物語	吉田勝江	講談社	少年少女世界文学全集 12（アメリカ編 2）
70	1960	7	若草物語	村岡花子	小学館	少年少女世界名作文学全集 7
71	1960	8	若草物語	安藤一郎	東京創元社	世界少年少女文学全集 10
72	1960	9	若草物語	沢田光子	日本書房	学年別児童名作文庫三、四年
73	1960		若草物語	吉田正俊	大修館	ドルフィン・ブックス 25
74	1961	6	若草物語	川端康成	偕成社	少女世界文学全集 12
75	1961	7	若草物語	加藤清美	日本書房	学年別世界児童文学全集三、四年
76	1961	8	若草物語	白木茂	岩崎書店	オルコット少女名作全集 1
77	1961		若草物語	宮脇紀雄	黎明社	世界名作全集
78	1962	6	若草物語	伊藤整	講談社	少年少女世界名作全集 9
79	1963	3	若草物語	村岡花子	講談社	少年少女新世界文学全集 9（アメリカ古典編 2）
80	1963		Little Women	鈴木忠夫	開拓社	The Kennett Library 7
81	1963		Little Women -若草物語-	J.Page	大阪教育図書	Oxford Series 12
82	1964	2	若草ものがたり	岡上鈴江	ポプラ社	世界名作童話全集 28
83	1964	3	若草物語	富沢有為男	偕成社	少年少女世界の名作 9
84	1964		若草物語	加藤清美	日本書房	学級文庫の三、四年文庫
85	1965	1	若草物語	新川和江	小学館	少年少女世界の名作文学 11・アメリカ編 2
86	1965	11	若草物語	立原エリカ	講談社	世界の名作 29
87	1965		若草物語	大久保康雄	三笠書房	
88	1966	5	若草物語	酒井朝彦	講談社	世界名作全集 14
89	1966	7	若草物語	恩地三保子	旺文社	旺文社文庫
90	1966	7	若草物語	松本恵子	ポプラ社	アイドル・ブックス 41
91	1966	10	若草物語	安藤一郎	河出書房	少年少女世界の文学 12
92	1966	12	若草物語	立原えりか	集英社	母と子の名作文学 1
93	1967	1	若草物語	北島洋子	りぼん 1 月号付録	りぼんカラーシリーズ
94	1967	7	若草物語	安藤一郎	偕成社	少年少女世界名作選 10
95	1967	11	若草物語	中山知子	講談社	世界の名作図書館 16
96	1967		若草物語	大久保康雄	三笠書房	若い人たちのための世界名作への招待

97	1967		若草物語	村岡花子	小学館	小学館名作文庫 2
98	1967		註解少女たち	前島清子	清水書院	英米名作選集 33
99	1968	2	若草物語	池山広	集英社	少年少女世界の名作 6
100	1968	5	若草物語	野上彰	ポプラ社	世界の名著 13
101	1968		若草物語（四少女第1部）	吉田勝江	角川書店	角川文庫
102	1968		若草物語	山中治郎・山内信一	泰文堂	英語多読・速読名作シリーズ 13
103	1969	11	若草物語	新川和江	小学館	少年少女世界の文学・カラー名作 7 アメリカ 1
104	1969	12	新訳若草物語	山主敏子	文研出版	文研児童図書館
105	1969		若草物語	沢田光子	日本書房	
106	1970		若草物語	W.L.ムーア・高木誠一郎	泰文堂	英語速読直解シリーズ
107	1972	1	若草物語	堀寿子	日本ブック・クラブ	こども名作全集 2
108	1972	1	若草物語	新川和江	小学館	少年少女世界の名作 13・アメリカ編 3
109	1972	10	若草物語	中山知子	講談社	少年少女講談社文庫
110	1972	11	若草物語	白木茂	岩崎書店	世界少女名作全集 2
111	1972	12	若草物語	伊藤佐喜雄	偕成社	少女名作シリーズ 15
112	1972		若草物語	山主敏子	偕成社	児童名作シリーズ 13
113	1973		若草物語	鶴見正夫	偕成社	世界の幼年文学カラー版 28
114	1973		わか草物語	船木枳郎	日本書房	幼年世界名作文庫
115	1973		若草物語	堀寿子	鶴書房	世界の名作
116	1974	9	若草物語	内田庶	集英社	ジュニア版世界の文学 1
117	1974		若草物語	掛川恭子	学習研究社	学研世界名作シリーズ 10
118	1975	6	若草物語	槙本ナナ子	集英社	マーガレット文庫・世界の名作
119	1975		わかくさものがたり	桂真佐喜	朝日ソノラマ	世界名作ものがたり 17
120	1975		若草物語・足ながおじさん	小泉龍雄	語学春秋社	ノベル・シアター・シリーズ 14
121	1975		若草物語ほか -愛情の豊かな子にする名作-	山主敏子	山田書院	少年少女世界名作ライブラリー 20
122	1976		若草物語	北島洋子	ユニコン出版	世界名作コミック
123	1977	2	若草物語	山主敏子	春陽堂書店	春陽堂少年少女文庫・世界の名作・日本の名作
124	1977	4	若草物語	藤沢美枝子	小学館	国際版少年少女世界文学全集 5
125	1977	5	若草物語	三鈴緑（漫画）	集英社	モンキー文庫・名作漫画シリーズ
126	1977	7	若草物語	加藤清美	日本書房	小学文庫三、四年
127	1977		対訳若草物語	三木春雄	南雲堂	南雲堂・学生文庫 46
128	1977		若草物語	加藤清美	日本教文社	小学文庫

129	1978	3	若草物語	立原えりか	学習研究社	ジュニアチャンピオンノベルス世界名作愛の少女名作ベスト7
130	1978	12	若草物語	谷口由美子	集英社	子どものための世界名作文学1
131	1978		若草物語	堀寿子	鶴書房	少年少女世界名作全集37
132	1979	3	若草物語	岡上鈴江	ぎょうせい	こども世界の名作6
133	1979	10	若草物語	宮脇紀雄	ポプラ社	ポプラ社文庫
134	1980		Little Women 「若草物語」	谷本誠剛	北星堂	
135	1982	3	若草物語	鈴木佐知子	集英社	少年少女世界の名作2
136	1982	10	若草物語	岡上鈴江	小学館	フラワーブックス
137	1982	11	若草物語	中山知子	講談社	国際児童版世界の名作2
138	1983	3	若草物語	瀬川しのぶ	ぎょうせい	少年少女世界名作全集12
139	1985	3	若草物語	矢川澄子	福音館書店	福音館古典童話シリーズ
140	1985	7	若草物語	中山知子	講談社	講談社青い鳥文庫
141	1985		若草物語	倉沢むつき（漫画）	旺文社	旺文社名作まんがシリーズ
142	1986	3	若草物語	鶴見正夫	偕成社	カラー版・世界の幼年文学
143	1986	11	若草物語	吉田勝江	角川書店	角川文庫
144	1986	12	愛の若草物語	桂真佐喜	朝日ソノラマ	世界名作ものがたり
146	1987	1	若草物語		ポプラ社	テレビ名作アニメ劇場
147	1987	1	若草物語	中山知子	講談社	少年少女世界文学館9
148	1987	2	若草物語	中山知子	講談社	講談社文庫
149	1987	2	若草物語	安藤一郎	偕成社	偕成社文庫
150	1987	2	愛の若草物語	おおくぼ由美	学習研究社	学研・ひとりよみ名作
151	1987	3	愛の若草物語	おおくぼ由美	角川書店	角川版世界名作アニメ全集
152	1987	3	愛の若草物語		小学館	小学館のテレビ名作
153	1987	3	わかくさものがたり	三越佐千夫	金の星社	せかいの名作ぶんこ
154	1987	4	愛の若草物語	おおくぼ由美	学習研究社	学研・絵ものがたり
155	1987	7	若草物語	山主敏子	金の星社	
156	1987	8	愛の若草物語	宮崎晃	小学館	小学館コンパクトTV・アニメブックス
157	1987	10	若草物語	蕗沢忠枝	ポプラ社	こども世界名作童話2
158	1987	12	若草物語	山主敏子	金の星社	フォア文庫
159	1989	1	若草物語	北島洋子（まんが）	小学館	てんとう虫コミックス・世界名作まんが
160	1989	5	若草物語	山主敏子	春陽堂書店	春陽堂くれよん文庫
161	1989	12	若草物語	伊藤佐喜雄	偕成社	新編少女世界名作選1
162	1990	1	若草物語	植松佐知子	集英社	少年少女世界名作の森4

163	1991	11	若草物語	白木茂	岩崎書店	世界の少女名作 6
164	1993	8	若草物語	掛川恭子	講談社	講談社文庫
165	1994	3	若草物語	谷口由美子	集英社	子どものための世界文学の森 1
166	1994	10	若草物語	安藤一郎	河出書房新社	世界文学の玉手箱 16
167	1995	2	若草物語	瀬川しのぶ	ぎょうせい	新装少年少女世界名作全集 12
168	1995	7	若草物語（映画ストーリーブック）	橘高弓枝	偕成社	
169	1995	10	若草物語	ときまつさなえ（作画）	サンマーク出版	サンマーク文庫コミック版・世界の名作
170	1999	8	若草物語	松本正司	同文書院	20 世紀テレビ読本『世界名作劇場大全』
171	2000	8	若草物語	小泉龍雄（訳注）	語学春秋社	イングリッシュトレジャリー・シリーズ 1
172	2000	9	若草物語	片岡しのぶ	あすなろ書房	名作再発見シリーズ
173	2001	8	愛の若草物語	しまだみちる	ぎょうせい	絵本アニメ世界名作劇場
174	2004	6	若草物語	矢川澄子	福音館書店	福音館文庫
175	2004	9	愛の若草物語	鏡京介	竹書房	竹書房文庫・世界名作劇場 12
176	2006	2	若草物語	高田賢一	ミネルヴァ書房	シリーズもっと知りたい名作の世界 1
177	2006	6	若草物語	小林みき	ポプラ社	ポプラポケット文庫 415-1
178	2006	10	若草物語	ペラペラ英会話編集室	コスミック出版	名作映画でペラペラ英会話 6
179	2009	3	若草物語	中山知子	講談社	講談社青い鳥文庫
180	2010	12	若草物語	中山知子	講談社	21 世紀版少年少女世界文学館 9
181	2011	12	若草物語	nev（マンガ）	学研教育出版	マンガジュニア名作シリーズ
182	2012	3	若草物語	松井里弥	ヴィレッジブックス	
183	2012	4	若草物語：四姉妹とすてきな贈り物	植松佐知子	集英社	集英社みらい文庫
184	2012	12	若草物語＝Little Women	高瀬直子（まんが）	小学館	小学館学習まんが世界名作館 2
185	2013	8	若草物語	海都洋子	岩波書店	岩波少年文庫
186	2014	10	若草物語	小松原宏子	学研教育出版	10 歳までに読みたい世界名作 5
187	2015	1	新訳若草物語	ないとうふみこ	KADOKAWA	角川つばさ文庫
188	2016	11	若草物語	薫くみこ	ポプラ社	ポプラ世界名作童話 13
189	2017	3	若草物語	中川千英子	新星出版社	トキメキ夢文庫
190	2017	10	若草物語	麻生九美	光文社	光文社古典新訳文庫
191	2018	7	若草物語	越水利江子	KADOKAWA	100 年後も読まれる名作 9
192	2018	11	若草物語	谷口由美子	講談社	講談社青い鳥文庫
193	2019	8	若草物語＝Little Women	nev（マンガ）	学研プラス	新訳マンガ
194	2019	12	若草物語 1&2	谷口由美子	講談社	

2021 年 3 月発行の「SGS Bulletin 13」35 ページの 12 行目、14 行目ならびに 24 行目に間違いがありましたので訂正します。

12 行目
誤 1900 年
正 1960 年ごろのものと思われる

14 行目
誤 同年
正 1960 年ごろのものと思われる

24 行目
誤 1900 年
正 1910 年